「バタヴィア紀行（１）」（2020年06月17日）

土曜日だ。ヘンドリックとティマースマとわたしの三人で出かけた。最初はこの付近を歩いて回ってみようということになり、徒歩でほどなくスネン Senen に出た。スネン市場 Pasar Senen というのは月曜市という意味だそうだ。この一帯は賑やかで、大勢のひとが往来している。

プリブミ兵士は暗い色の軍服、白色スーツのヨーロッパ人男性、地元ブタウィ人の華やかな色使いの衣装、華人は幅広のズボンに辮髪姿。実に多彩なバラエティあふれる光景を目にすることができる。バタヴィアは多民族多文化に満ちている。

大通りには街路樹が植えられ、通りの片側には黄白色に塗られた美しいヴィラが並んでいて、その豪奢なヴィラの表にはオープンテラスが備えられている。その並びにある背の高い建物は植民地軍高級将校が住んでいる家だ。道路の反対側は華人の住宅が並んでいて、その奥には活気あふれる華人カンプン kampung が連なっている。

プリブミ兵士やヨーロッパ人兵士のグループがひっきりなしに往来している。プリブミ兵士はみんな裸足なのが面白い。オランダからバタヴィアに来るとき乗った蒸気船ネーデルランド号で働いていたアブドゥラとその部下の水夫たちも全員が裸足だったのを、わたしは思い出した。

プリブミ兵士たちを観察したところでは、若者もいるが勤続30年のベテラン兵士も混じっているようだ。そういう老練伍長や軍曹などの下士官までもが裸足で歩いている。それでもヨーロッパ人兵士は下士官に敬礼しなければならない。政府は後になって、プリブミ兵士に靴を支給した。

ヨーロッパ人兵士の中にも伴侶を連れて散策している者がある。伴侶はプリブミ女性だが、カップルたちはしっかりした足取りで悠然と歩いている。美人のニャイは見当たらないけれど、それでもカップルの印象は決して悪くない。ニャイたちは優しく、フレンドリーに見える。でもそれは怒っていないときだからだろう。怒ったりしたら、・・いやそれはまた今度の話にしよう。

<出典 https://en.wikipedia.org/wiki/Trams_in_Jakarta>

スネンの大通りを蒸気トラム trem uap が走っている。バタヴィアの下町（コタ旧市街）からモーレンフリート Molenvliet、レイスウェイク Rijswijk、ヴァーテルロー広場 Waterloo-plein を経由してメステルコルネリス Meester Cornelis[1]との間を往復しているのだ 。

路上を通行している乗り物は、それだけではない。今にも崩れて分解してしまいそうなプリブミの荷車から、さまざまな種類の馬車までもが続々と通りを通過している。一頭の馬に引かせたオープン二輪馬車はサド sado と呼ばれる。これは乗客が前と後で背中合わせに座ることから、フランス語 dos-a-dos をプリブミが訛ってサドと呼ぶようになったものだ。時に兵士や華人のグループがこぼれそうになるくらい大勢でしがみつき、御者が馬を激しく鞭打っている姿を目にすることもある。

われわれは左に曲がって片方が華人商店の並び、反対側は華人食堂の並んでいる道に入った。と突然、腹の虫が騒ぎ始めた。よだれが出そうだ。これはヤシ油と豚脂の料理される香りだろう。おや、きつい香りが混じっている。ああ、これがドリアンだ。われわれは三人が三人とも、吐きそうになった。

食堂の奥にいた上半身裸の太った華人が笑いながらムラユ語でわれわれに声をかけてきた。かれが何を言ったのか、われわれの中に分かる者はだれもいない。どうやら、客だと思って呼び込んでいるのだろう。ヘンドリックが食べたいと言い出したから、わたしは不安になった。「食べるのはもっとあとだ。さあ、もっと歩こう。」とわたしはふたりを引っ張った。

どんどん歩いて行くと、小さい橋にたどり着いた。華人の建物は途切れて、右側にはうらさびれた事務所と倉庫があるばかり。左側にも倉庫があり、そして運動グラウンドがある。グラウンドでは第十大隊兵員がフェンシングのトレーニングをしていた。倉庫の窓から中をのぞくと、ヨーロッパ人兵士とプリブミ兵士が体操をしている。[続く]

---

[1] 現在の Jatinegara。路面電車の発展はこちらに。

「バタヴィア紀行（2）」（2020年06月18日）

われわれはどんどん歩き続けて、軍楽隊のブロックにやってきた。楽隊員の住宅地区をフェンスに沿って回ると、ヨーロッパ人や印欧混血の若者たちがサッカーをして遊ぶ広い空き地がすぐ近くにあった。今そこの草地では軍隊が整列行進の訓練を行っている。ここがヴァーテルロー広場だった。広場の中央には石造りの白い円柱があって、その頂上にはみっともない犬が・・あ、いや、あれはライオンだったな。これはフランスがワーテルローの戦いで敗れたのを記念して建てられたものだ。

広場の東側には美しい小さな建物、東インド最高裁判所、と白塗りの豪壮な宮殿が広場を睥睨している。ダンデルス総督が建てたこの宮殿はいま、戦争省・教育省・宗教省・工業省などの政府機関が使っている。そこにはまた、東インド参議会の大会議場もある。一階には首都防衛軍憲兵隊や狙撃隊の本部も入っている。

宮殿の表にはバタヴィア創設者であるヤン・ピーテルスゾーン・クーンの銅像が建てられている。その銅像はバタヴィア創設250周年を記念して除幕された。わたしが住んでいるヴェルテフレーデン兵舎がどこにあるのかが、今はっきりと判った。クーンの銅像の裏だったのだ。

<出典 https://kolonialemonumenten.nl/2017/07/04/waterloo-batavia-1829/>

宮殿の横にあるのがコンコルディア Concordia 社交クラブ。そこにはたいへん美しく設計された広い庭園があり、建物とよく調和している。水曜の夕方と土曜の夜には軍楽隊のコンサートが開かれる。アムステルダムからツァーフマン Zaagman を招く必要などないくらいだ。

最初コンコルディアは将校専用クラブだったが、非軍人も入れるようになった。しかし下士官以下は入ることができず、かれらは軍人用カンティンのデパイプ De Pijp で遊ぶしかできない。ヴァーテルロー広場沿いには将校官舎が並んでいる。建物のサイズは大小さまざまだ。小さいのは少尉や中尉、大きいのは大尉、もっと広くて見栄えの良いのは佐官級が使っている。

官舎になっているのは家だけで、家具調度類は本人負担になっているそうだ。ただし官舎が士官全員に行き渡るわけでもない。必然的に、官舎に外れた者は借家住まいになる。かれらには家賃が支給されるらしい。家族持ちでない者はホテルやペンション暮らしだ。

ヴァーテルロー広場の片隅で行われているサッカーの試合を、われわれは見物した。プリブミのイレブン同士が対戦している。着ているユニフォームはなかなかのもので、動きも迅速だ。おまけにかれらは上手にオランダ語を話す。

かれらは医学生だとわれわれの近くで見物していた第十大隊の兵士が教えてくれた。その兵士はわれわれをデパイプに誘った。もう夕方の5時半で、夜の闇が辺りを包むのもあと少し。われわれはコンコルディアに向かい、そこを通り越してデパイプに着いた。

中に入って、われわれは驚いた。ネイメーヘン Nijmegen のヴァル Waal 兵舎にある、狭く汚らしいカンティンとは大違いだったからだ。オランダのカンティンは兵舎内にあるが、東インドでは兵舎の外の別の建物になっていて、整理整頓されている、と第十大隊の兵士は教えてくれた。バタヴィアのような規模の大きい防衛軍の場合は独自の建物の中に読書室・演劇ホール・ビリヤード室・九柱戯場などが備えられていて、兵士たちの演劇や軍楽隊のコンサートも行われるそうだ。兵士はカンティンでふざけ合ったり、踊ったりすることもできるということだが、兵隊用の施設だから女性がいるわけではない。踊るのは男同士ということになる。時には海軍の水兵が来たり、海運会社の乗組員が来たり、港の貨物運び人が来ることもある。

書籍の貸し出しから観劇や音楽鑑賞に至るまで、兵士は施設内の利用がすべて無料だ。カンティンで売られている商品は、酒も含めてすべて廉い。酒を扱わないカンティンを別に設ける計画もあるそうだ。中を見

学し終わったわれわれ三人は、案内してくれた兵士を誘って喉の渇きを癒した。氷の入ったオレンジジュースが一杯わずか5センだった。

中で働いているプリブミのウエイターたちは白い制服に赤いアクセサリーを付けている。船の中と同様に、ここでもチップを与える必要がない。ここにあるのは、まるでアムステルダムのカフェのような雰囲気だ。それぞれのグループが飲食しながら談笑している。マジョリティを占めるヨーロッパ人兵士たちはバーの近くに陣取り、船員たちは奥の方に座っている。ネーデルランド号の船員が顔見知りのわれわれに近寄って来た。互いにバタヴィアの情報交換をしていると、案内してくれた兵士がアイデアを出した。日曜日に蒸気トラムでコタへ行き、そのあとサドでコタの中を巡ってはどうか、と。[続く]

「バタヴィア紀行（3）」（2020年06月19日）

われわれはデパイプでおよそ一時間楽しんでから、散策しがてら兵舎へ戻るためにそこを辞した。外に出ると、月光が煌々とあたり一面を照らしている。白塗りの美しいヴィラが光の中に浮き上がり、熱帯のエキゾチックな光景がわれわれを幻想の世界へいざなってくれる。その幽玄な明るさに、わたしは雪に覆われたヨーロッパの夜とよく似たものを感じた。いや、これは決してホームシックではない。

われわれは月光を浴びながら、まるでおとぎ話の世界に入ったかのような雰囲気を味わいつつ、歩を進めた。ひともサドも稀にしか出会わず、静かで寂しく、そして落ち着いている。アムステルダムやネイメーヘンの夜からは想像もできない穏やかさだ。

どこをどう歩いたのかよく覚えていないが、ヘルトフスパルク Hertogspark の軍司令官宮殿を目にしたことは覚えている。病院通り Hospitaalweg（今の Jl Dr. Abdulrachman Saleh)まで来たら、プリブミの若者の一団がギターとマンドリンを鳴らしてムラユのラブソングを歌いながら歩いているのに出くわした。わたしはこのバタヴィアの美しい夜に魅了されて、感極まってしまった。

かれらはセンスの良い衣服を着ており、おまけに上手にオランダ語を話す。ネーデルランド号の水夫長、アブドゥラのブツ切れブロークンオランダ語でなく、まるでネイティブのようなオランダ語なのだ。そのうちかれらは大きな建物の表門から中へ入って行った。その門の上に掲げられてあった表示には School ter Opleiding van Inlandsche Artsen と書かれていた。おお、かれらはヴァーテルロー広場でサッカーに興じていた若者たちと同じ、医学生だったのだ。わたしはかれらと会話したい衝動に駆られたが、夜のこととてその欲求を抑えた。われわれがその門の前を通る時、そこでタバコを吸っていた若者たちにわたしは声をかけた。「ボンスワール、ヒーレン！」若者たちはかしこまった声であいさつを返してきた。

われわれは更に進んで軍大病院の前を通過し、兵舎へと向かった。夜8時ちょうどに砲声が鳴り、ラッパが吹かれた。われわれは夜8時半の呼集に出たあと、兵舎のベッドで明日の予定に思いをめぐらしつつ眠りに落ちた。

わたしは生粋のアムステルダムっ子だ。ヨルダアン地区の貧しい家庭に生まれた。父親は飲んだくれで、母親が賃稼ぎをして何とか暮らしていた。父親が母親を殴ったとき、もう大きくなっている長兄が父親を実力でやっつけたことを覚えている。わたしが育ったのはそんな家庭だ。

わたしは四人兄弟の末っ子で、悪ガキでなかったからたいていのひとに可愛がられた。末っ子は悪ガキの兄たちがどんな待遇を受けるかを見て育っているから要領が良くなるのが普通だが、わたしは自分があまり表裏を持たない人間であることを知っている。

そのころ、金持ちの息子が兵役逃れのために代役を金で買うことが行われていた。長兄は代役に買われて、第七歩兵連隊の兵士になった。まだ小さかったわたしはときどき兵舎へ遊びに行き、軍隊というものを身近に感じるようになった。そこには、幼い心に憧れを与えるものが散りばめられていたにちがいない。長兄が退役して、けっこう大きな金を母への土産にして家に帰って来たとき、わたしは自分の将来の道を半ば以上、決意していたと言えるだろう。1892年の夏、18歳のわたしはアムステルダム第七連隊の兵士に志願して、採用された。

数年を経て筋金入りの兵士に鍛えられたわたしは、まだ見ぬ世界を体験したいという冒険の夢に邁進することにした。冒険家は小学生のころから夢見ていたものだったのだから。手っ取り早いのは、東インド植民地軍に志願することだ。わたしはネイメーヘンに移った。[続く]

「バタヴィア紀行（４）」（2020年06月22日）

蒸気客船ネーデルランド号はインド洋の波の上を走っている。一等と二等の乗船客は上の方にいるが、われわれ兵士は船倉だ。乗船客が上で自由な暮らしを謳歌しているというのに、植民地軍に派遣される兵士は分遣隊指揮官の号令下に兵舎暮らしの延長を続けなければならない。

上が突然騒がしくなった。船がスンダ海峡に入ったのだ。ジャワ島の陸地が見える。緑の島々が、そして密林と咲き誇る色とりどりの花に覆われた海岸が、波しか見えなかった単調な船内の暮らしを一変させた。海の真ん中で煙を吐くクラカタウ島もある。漁民の小舟が徘徊し、海峡の向こうのジャワ海を南北に走る蒸気船も見える。あれはリアウやシンガポールに向かうKPM(Koninklijk Paketvaart Maatschappij)の客船だろう。

ネーデルランド号に乗っている客は手すりや窓から、飽きもせずに美しい陸地を眺めている。昼寝をしようという考えはどこかに置き忘れて来たかのようだ。

夜になっても、上の方は静かになる気配もなく、昼間のように賑やかで、おまけに合唱の歌声まで飛び交っている。ほどなく、この長い船旅は終わるのだ。長い道程の終わりを迎えて、船旅をつつがなく遂行してくれた船長と乗務員たちに謝辞を述べ、別れの歌を合唱するのも、センチメンタルな気持ちをかき立ててくれるものだ。

船の進行方向のずっとかなたに光が見え始めた。それはタンジュンプリオッ Tanjung Priok 港の明かりだ。「陸の匂いがするぞ。」と、もう12回もこの航海を経験している水夫が言う。入港許可を意味する火矢が放たれ、港湾パイロットが上がって来た。

船の右手に海軍の舟艇が何隻か現れて、歓迎の叫び声を上げている。ネーデルランド号の乗客も、それに応えて叫び声を上げた。海底が浅くなり、船は速度を落とす。ライトに照らされた埠頭が奥の倉庫と一緒にぐんぐん船に近寄って来る。これはまるでヨーロッパだ、とわたしは思った。だが埠頭に集まって手を振っている群衆は、白いスーツのヨーロッパ人、褐色の肌のプリブミ、黄色い華人などがごちゃ混ぜになっている。そう、ここは東インドなのだ。

兵士たちが国家を歌い始めると、乗客も一緒になって国家を歌い出した。気持ちが引き締まって来る。歌い終えたわれわれは、三度歓呼した。船が接岸してはしごが下ろされると、喧噪が渦巻いた。乗客たちは先を争って陸地に降りようとする。埠頭にいる群衆も、船に上がろうとする雰囲気が満々だが、降りる者を優先しなければならない。

将校を除いて分遣隊の上陸は禁止され、翌日まで船内にとどまるよう命じられた。東インドの最初の夜は船内で。これは未知の東インドがわれわれに与えるすさまじい歓迎の初体験でもあったのだ。港周辺の湿地から立ち昇って来る激しい腐敗臭、そしてヨーロッパ人の血を求めて襲い掛かって来る蚊の大群。これでは眠れるわけがない。わたしはパイプを出してタバコを吸い始めた。身の回りをタバコの煙で埋めることで、蚊の襲撃は多少とも軽減されたようだった。

翌朝、全員が鉄道駅の乗り場に並んで列車が来るのを待った。タンジュンプリオッ駅からヴェルテフレーデン Weltevreden 駅[2]まで行くのだ。もちろん、ヨーロッパ人やプリブミの一般市民も混じっている。

やって来た列車が出発すると、われわれは一言も発することなく車窓からの風景に見ほれた。停車する駅は小さい駅舎で、たいして印象的でない。列車を待っていたひとびとは、先を争って乗り込んでくる。街中に入ってしばらく行ったころ、行進曲の演奏が聞こえて来た。われわれを歓迎するために、ヴェルテフレーデン駅で軍楽隊が待ち構えていたのだ。昨夜先に船から降りた分遣隊指揮官が政府要人と談笑している姿が見えた。

---

[2] 現在の Gambir 駅

駅にいた娘さんのひとりが、「この兵隊さんたち、男らしいわね。」と言っている声がわたしの耳に聞こえた。そうかもしれない。東インドにいるヨーロッパ人男性たちは概して青白くなよなよしているひとが多いようだから、われわれと比べるとそう見えるのだろう。しかし後になってわたしは、顔色が青白いのは不健康の印でなく、暑さのせいでそうなるのだということを悟った。[続く]

「バタヴィア紀行（５）」（2020年06月23日）

われわれは二列縦隊に整列すると、軍楽隊を筆頭にして行進を始めた。駅の外の路上にいたプリブミが、華人が、アラブ人が、時ならぬわれわれの行進をあっけに取られて眺めている。われわれはしっかりした歩調でヴィレムスケルク Willemskerk 教会とヘルトフスパルクの前の道を、道路脇でわれわれを眺めているひとびとを横に見ながら美しいヴェルテフレーデンの軍用地区に向かった。

小石の敷き詰められた広い道の東側には、丁寧に刈り込まれた植栽に囲まれている白塗りの大きなヴィラが並び、広い空間とバランスの取れたヴェルテフレーデンの美しさにわれわれは感動した。

軍用地区に入ると、あちこちの兵舎からヨーロッパ人やプリブミの兵士が外に出て来て、興味津々と新来の部隊を眺めている。汗びっしょりになっているわれわれを眺めて、自分の初体験を思い出している者もいるにちがいない。

とある建物の前でわれわれを待ち受けていた将校ふたりが進み出てきて、われわれに号令をかけた。「右向け一、進め！」われわれはその表門から中に入って行った。そこは補給部隊本営だった。

中に入って隊列を組み直したわれわれの前に勲章をいっぱい胸につけた大尉が進み出てきて点呼を行い、そして短い歓迎の訓令を述べた。最後に述べたのは、あまりたくさんアルコールを飲まないこと、あまりたくさん果物を食べないこと、だった。

兵舎に入ったわれわれに、ベッドが割り当てられた。兵舎にはもちろん先住者がおり、そして想像もしなかったことには、なんと女がいて子供たちもいた。この話はもっと後のことにしよう。

東インドの水浴スタイルも、たいていのヨーロッパ人にはなじみのないものだ。ここは大きな共同水浴場になっていて、中にあるセメント造りの巨大な水槽に水が貯められている。

水浴場の中には、パジャマズボンとカバヤ kabaja と呼ばれる丈の短い白シャツを着て入る。タオルと石ケンを忘れてはならない。着ているものを脱ぐと貯水槽へ行き、小さい桶で水を汲んで身体にかける。石ケンを頭のてっぺんから足の先まで身体になすりつけてからこすり、水で洗い流す。全身均等に石ケンを洗い流すために、桶が12回水槽を往復する。

終わればタオルで身体を乾かす。このマンディ mandi という儀式は毎日三回行われるのだ。早朝の起床の合図で起きてからすぐに、午前11時に朝の課業が終わったあとに、午睡が終わって夕方の呼集が行われる午後3時前に。水浴場は営舎から少し離れているから、兵隊はたいへんだ。

東インドで軍役を経験したベテランたちは、身体はもとより下着からはじまって生活のいろいろなフェーズで清潔さをたいへん重視し、おまけに自ら実践している。一日三回のマンディのために、心身にしみついた生活習慣のたまものであるに違いないだろう。

水浴して汗を流してから、われわれは炊事場に並んで食事の配給を受けた。もちろん、ナシとサンバルという東インドの食事は、われわれにとっての初体験だった。

東インドでは温かい食事が一日二回出る。11時から12時までの昼食と夕食だ。夕食は夜8時半に締め切られる。この日の昼食メニューは、スープ、飯、肉、サンバルだった。

生まれて初めてサンバルを目にしたフリースランド出身の仲間は、それをスープに混ぜるものだと思った。そして大騒ぎが起こり、かれはヤカン一杯の水を飲み干した。ともあれ、かれのおかげでみんなはサン

バルの食べ方をすぐに理解した。夕食メニューはキャベツと缶詰ソーセージを温めたもので、デザートにバナナが付いた。

翌朝の食事はパンとバター、缶詰のサーモンにコーヒー。東インドの兵舎の食事は、オランダ本国よりはるかに豪華だ。朝食はたいていパンとバターに、チーズ・ハム・ソーセージ・卵の目玉焼き・サーデンなどが必ず付く。アチェでは、駐屯兵の食事にチョコレートプリンのデザートが付くそうだ。

ヨーロッパ人はたいてい主食をジャガイモにしているが、東インドでは地元の産物である米を食べなければならない。そして飯にはサンバルが必ず付く。東インドの味覚がこのようにして形成されて行く。[続く]

「バタヴィア紀行（６）」（2020年06月24日）

日曜日の朝、ヘンドリックとティマースマとわたしの三人は兵舎を出てスネンに向かった。パサルスネンはいつ来ても賑やかだ。われわれはメステルからやってくるトラムを待ちながら、活気あふれるスネンの情景を楽しんでいた。

パサルスネンはヴェルテフレーデンの一部だが、雑然としていて美的な秩序が感じられない。アムステルダムの街をすみずみまで彷徨しつくしたわたしのような者の目には、構成美が欠如していて混乱の渦にしか見えない。でも楽しいには楽しいのだ。

われわれが立っている道端の木陰には華人の床屋がいて、順番を待っている大勢の客を手早く処理している。といっても、そこに集まっている大勢のプリブミの中の客は一部だけで、他は友人や仲間が連れ添って来ているだけだ。かれらはきっと将校邸で働いている下男や女中だろう。みんなは床屋の周りにしゃがんで、円を描いている。

辮髪の緑陰床屋はいろいろな散髪道具を巧みに操って、実に手早く仕事を進めて行くが、手に持っているのは散髪道具だけでなく、水を含ませたスポンジも片手に持っている。床屋が手にかけているのは頭髪だけでなく、耳・目・鼻の穴まできれいにしているのだ。

と突然、思いがけないことが起こった。しゃがんで床屋の舞台を眺めていた群衆がいきなり遠くを指さして叫び声をあげ、立ち上がって逃げ出したのだ。蜘蛛の子を散らすようにして群衆と、床屋と散髪の終わっていない客までもが一斉に走り出した。

指さされた方角を見ると、一頭の暴れ馬がちょうどこちら目掛けて駆けて来るではないか。すると隣にいたティマースマが進み出て馬の進路に立ちふさがると、大手を広げて馬を止め、なだめてしまった。スネイク出身のかれは、馬蹄作り職人の息子だったのだ。馬の扱いに慣れているのも当然だ。

馬の後を追って走って来たプリブミの少年にかれは手綱を握らせた。少年は息を切らせながらムラユ語でティマースマに何かしゃべっていたが、多分礼を述べていたのだろう。わたしの耳は、その中に混じっていた言葉「トアンカプテン Tuan Kapten」だけを聞き取ることができた。

そしてほどなく、そのトアンカプテンが出現したから、わたしはその言葉の意味しているところが腑に落ちた。馬の持ち主の大尉殿は、パジャマズボンに白い上着、そして大尉の軍帽をかぶってやってきた。

かれはティマースマの巧みな馬裁きの能力を賞賛し、歩兵兵士でこれほどの能力を持つ者は稀だとほめた。そして「東インドでもうどのくらいになる？」と尋ねたから、「数日前に到着したばかりです。」と答えると、大尉殿は三人に葉巻をくれた。ティマースマはさらに札束までもらった。

「われわれはこれからバタヴィアを見て回るんです。」と言うと、大尉殿は三人それぞれに２５センをくれた。

世話係の少年が馬を連れて去り、大尉殿も立ち去ると、しばらくして遠くから蒸気トラムの鐘の音が聞こえて来た。オランダとそっくり同じだ。三両の客車を引いている先頭の蒸気機関車にはオランダ人の運転士ひとりとプリブミの助手ふたりがいて、運転操作に余念がない。

トラムが止まったので、われわれは乗り込んだ。プリブミの車掌がふたりいて、立派な制服を着ているが、はだしだ。車掌頭は軍を定年退職したヨーロッパ人のようだ。客車は一等から三等まで、クラスで分けられている。クラスごとに料金が違い、三等は極端に廉い。

プリブミでも料金さえ払えば一等二等に乗って構わないそうだが、それをするのは金持ち上流層だけのようだ。プリブミ一般庶民は三等のほうが居心地が良いのかもしれない。不思議なことに、華人・アラブ人・ヨーロッパ人が三等に乗るのは許されないという決まりが定められている。東インドにおけるオランダ人のレーシズムの一端がそこに反映されているのかもしれない。

ティマースマがもらい物の葉巻を車掌頭に進呈したため、車掌頭はわれわれのガイド役になってしまった。トラムはヴェルテフレーデンを左に見ながら北上していく。車掌頭は車窓から見える、目立つ建物を逐一、説明してくれる。[続く]

「バタヴィア紀行（7）」（2020年06月25日）

グヌンサハリ Goenoeng Saharie 通りを北上していたトラムはフレイメツェラーヴェフ Vrij-metselaarweg に左折した。美しく和やかなこの直線道路には東方の星をシンボルにするフリーメーソンのロッジがある。プリブミは悪魔館と呼んでいるそうだ。道路の左側には将校官舎が並んでいて、一家そろって日曜日の自由な時間をのんびり過ごしているのがよく見える。

フリーメーソンロッジの十字路で右折すると、右側にはフリーメーソンロッジが設けた図書館があり、一般公開されていてあまり裕福でないひとびとが大勢利用している。左側はヴェルテフレーデン軍人シアター Schouwburg Weltevreden になっている。車掌頭が言うには、劇場の中はとても涼しいそうだ。

そこでは、オランダ人のトニール toneel グループ、イタリア人オペラグループ、イギリス人オペレッタグループ、有名な音楽団、その他いろいろなグループが舞台芸を見せてくれる。建物の中は客席・厩舎・花園・表ベランダ・脇ベランダなどに分けられていて、入場料金は4．5フローリン、3．5フローリン、2．5フローリン、1．5フローリン、0．75フローリンと細分されている。トラムはその角地を左に曲がった。

運河沿いの繁華な道路をトラムは西に向かう。さっき左に曲がった場所には運河をまたぐ大きな橋があって、その向こうはパサルバル Pasar Baru 商店街だ。商店街の向こうに見えるのは華人住宅地の並び。建物はみんな似たような中華風のデザインで作られ、特有の雰囲気が漂っている。中でも特徴的なのは、さまざまな色に塗られた店の正面の華やかさで、その破風には黄金のインクで秘密の漢字が書き連ねられているとヨーロッパ人は信じている。

それよりも何よりも、華人街の賑やかさはかれらが一日中路上で暮らしていることが生み出しているに違いあるまい。かれらは路上で飲み食いし、売買し、喧嘩し、散髪しているのだから。交差点の真ん中を大勢の歩行者が通っている。苦力たちが叫び声をあげ、奥さんと娘さんが買物し、サドや荷車も人間の隙間を通り抜ける。ここの華人街もパサルスネンと同じだ。空気がよどんでいる。

曲がった後の運河の向こうはヨーロッパ風の光景に変わった。車掌頭の話では、そこはインド人やセイロン人、あるいは印欧混血の貧しいヨーロッパ人が住んでいるエリアだそうだ。左側には郵便電信局があり、続いてサンタウルスラ Santa Ursula 修道院と続く。東インドで一番サービスのひどいのが郵便だ、と車掌頭が批評した。そもそも政府自身が郵便業務を信用しておらず、公文書はすべて書留で発送されている。書留にしなければ、郵便物が頻繁に姿を消してしまうのだから。新聞など特にそうらしい。届かなくて当たり前という風潮は絶望的と言えよう。郵便物が姿を消しても、犯人が捕まったこともなければ、責任者が明らかにされたこともない。

トラムはスフールヴェフ Schoolweg（今の Jl Dr. Sutomo）を通り過ぎてスライスブルフ Sluisbrug（水門橋）に到着。この辺りの運河の北側は白く塗られた家や商店が並んでいて南ヨーロッパの雰囲気が濃い。

この水門橋というのは、南から流れて来たチリウン川の水をさっき通って来た北東向けのパサルバル運河と西向きのレイスウェイク運河に分岐させる地点になっていて、橋の下に水門が設けられているのである。ごうごうと音を立てて流れるチリウン川の茶色い水はパサルバル運河めがけて流れ去って行く。

パサルバル運河は最終的に南往き街道であるグヌンサハリ通り西側の直線運河につながって、海に向かう。レイスウェイク運河のほうは、ハルモニ Harmonie でモーレンフリートにつながり、旧バタヴィア城市の真ん中を通って海に向かう。

複雑なバタヴィアの運河システムは、雨季の洪水への対策という意味も持っている。山に降る雨は毛細血管のような水流を作って低地に下って来る。それらの小川は岩のごろごろした美しい風景を見せてくれるものの、大量の水が都市に押し寄せるのを防いではくれない。それらの水が集まって動脈をなし、太い川となったチリウン川の本流支流は普段から川水が運んでくる土砂や泥が沈殿して容積を小さく狭くしているから、雨季の大量の雨を流し切れずに氾濫してしまう。

洪水で水浸しになるのはだれもが不愉快だが、そんなことだけでは済まない。水が引いたあとには汚物が残され、それが数々の病気を蔓延させるのである。[続く]

「バタヴィア紀行（８）」（2020年06月26日）

水門橋から乗って来たのは華人がひとりだけだった。車掌頭は「今日は日曜日だから、あんたがたは運がいい。」と物語る。自転車にしろ四輪車にしろ、自分の交通機関を持っていない勤め人たちはだいたいトラムを利用するから、トラムはいつも満員状態で走っている。勤めはたいてい夕方5時で終わるので、そのあとの帰宅ラッシュはすさまじい。土曜日だけは半ドンで、正午１２時に終わる。そのあとはみんな、月曜の朝までのんびり三昧だそうだ。涼しいバイテンゾルフへ汽車で遊びに行く者が多いから、週末は混雑が鉄道の方に移る。

トラムがまた動き出した。左の方に古い要塞が見える。そのシタデル Citadel は首都防衛軍の兵器庫になっている。そこを取り巻くヴィルヘルミナパルク Wilhermina Park は、喧噪渦巻く大都会の真っただ中にあるとは思えないほど穏やかで平和な場所だ。子供を連れてきて遊ばせたり、恋に酔った男女がふたりだけで散歩したりするのに最適な場所だと言える。シタデルの古びた壁を周遊している小道は家族ピクニックに向いている。要塞が公園の周囲の情景によくマッチしていて心地よいし、おまけに要塞の警備兵が周辺一帯を監視しているから、治安の面でも昼夜の区別なしに安心できる。

公園の入り口に近いところにアチェ記念碑が建てられている。たいへんな辛苦を乗り越えて、スマトラ島の北端部にオランダ民族が威勢を轟かせるのに成功したのを記念して建てられたものだ。

トラムの右側には美しいデザインの平屋棟に囲まれた背の高いビルが建っている。それがKPM本社だ。そこには貨物や旅客の海運事業を行っているロッテルダムロイド、ロッテルダム国際クレジット＆トレード協会、Ｊダンデルス＆Ｃｏ．輸送代理店などの諸会社のオフィスが入っている。Ｊダンデルスは Stoomvaartmaatschappij、Koninklijk Paketvaart Maatschappij、Jave-Cina-Japan Lijn、Nippon Yusen Kaisha、Java-Bengalen lijn などの海運会社代理店を務め、また外国為替会社 Nederlandsche-Indische Escompto Maatschap-pij の代理店にもなっている。

このオフィスコンプレックスは、汚く・暑く・不健康なバタヴィア下町地区で行われていた健康さを無視したビジネス活動を反省して、健康で衛生的な暮らしの中でのビジネス活動に必要とされるあらゆる条件を満たして作られたものだ。昔、タンジュンプリオッ港ができる前、貨物船は沖合で投錨して荷をはしけに移し、はしけがチリウン川河口からバタヴィア城市内のカリブサールまで入って来て、川岸で荷役した。港湾施設と荷役設備のモダン化は、海運会社が港から遠く離れたヴェルテフレーデンにオフィスを構えることを可能にしたのである。

トラムはノードウェイク Noordwijk で鉄道線路と交差し、レイスウェイクに入って行く。ノードウェイクにはバタヴィア⇔バイテンゾルフ[3]間を走っている鉄道の駅[4] があるのだ。レイスウェイクのトラム線路脇を、茶色の制服を着て縄で縛りあわされている多数のプリブミが歩いているのが目に入った。制服の腕に白い筋の入ったリーダー格の男はちょっと離れて歩いている。「ああ、あれは懲役囚だ。ここではケッティンヨンヘン Kettingjongen と呼ばれている。」と車掌頭は説明してくれた。グロドッ Glodok 刑務所から囚人がトラム線路脇の草取りのために送り出されてくるのだそうだ。リーダー格の男も囚人のひとりであり、ムラユ語でマンドル mandor と呼ばれている。

かれらに逃亡の機会はいくらでもある。しかし逃亡しようとする者はほとんどいない。かれらはオランダの制度下に運営されている犯罪囚の立場を甘受するほうが、逃亡してお尋ね者になった上に、更に生きる糧を自ら手に入れるための努力まで払う立場よりましだと思っているようだ。「アチェで従軍すれば、かれらのような人間をいくらでも目にすることができる。糧食やら武器弾薬を取って来させたり、あるいは負傷兵を担架に乗せて後送するような役割をかれらは黙々と実践してくれる。かれらは戦場で、とても有用で価値ある存在なのだ。」車掌頭はそうコメントした。[続く]

「バタヴィア紀行（９）」（2020年06月27日）

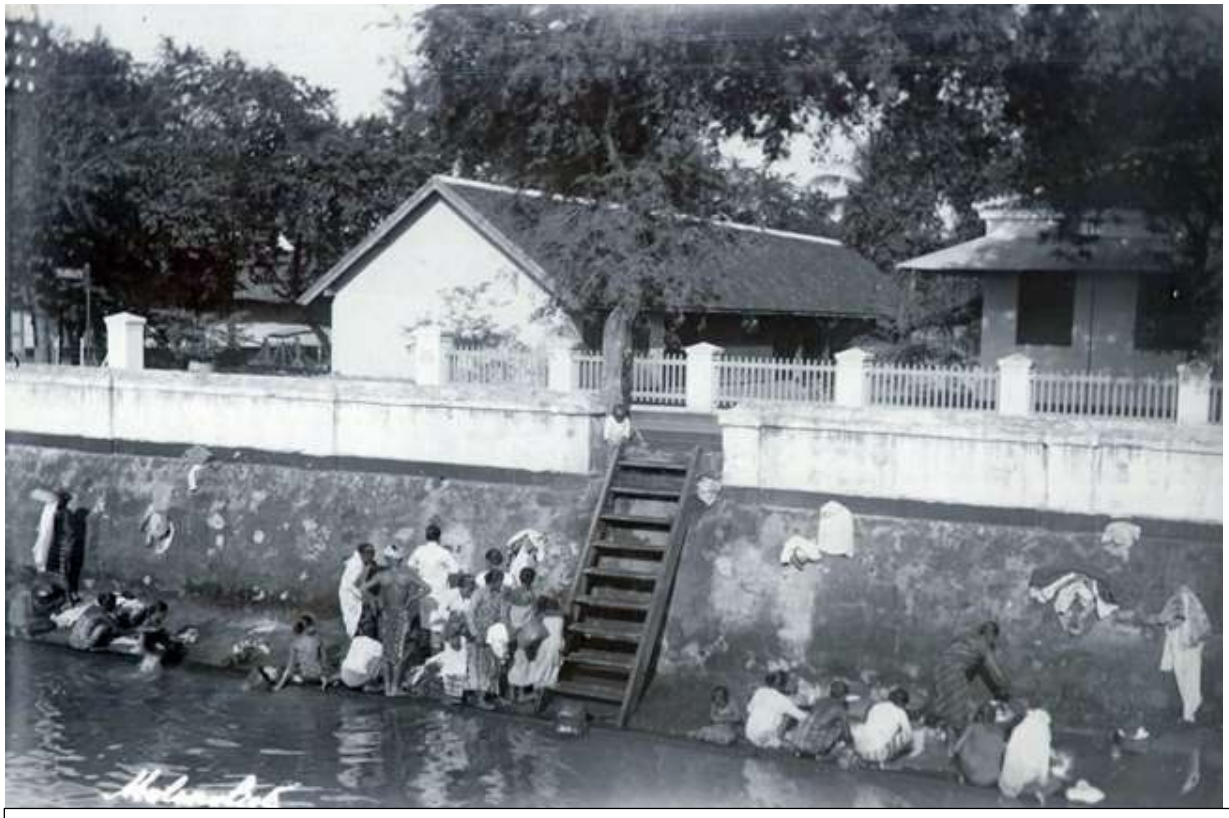
レイスウェイクとノードウェイクにはさまれた運河[5]でわれわれは、現代文明にふさわしからぬ光景を目にした。大都市の真っただ中の大通り沿いの運河で、大の男や女が水浴しているではないか。アムステルダムの運河でこんなことが行われたなら、たちまち大騒ぎになることだろう。しかしバタヴィアでそれを行っているのは、オランダ人でなかった。茶色い水に身体を浸して水浴しているのはプリブミの男女、大人や子供た

---

[3] 現在の Bogor

[4] 現在の Juanda 駅

[5] Harmoni と Juanda の間の堀。写真は現在の Jl. Gajahmada に沿う運河



Molenvliet, Batavia in 1885
<出典 https://twitter.com/sejarahri/status/1234628992843436032>

ちだったのである。運河をよく観察してみると、堤の上から水中へ降りて行くための８～９段の階段があちこちに設けられているのがわかる。

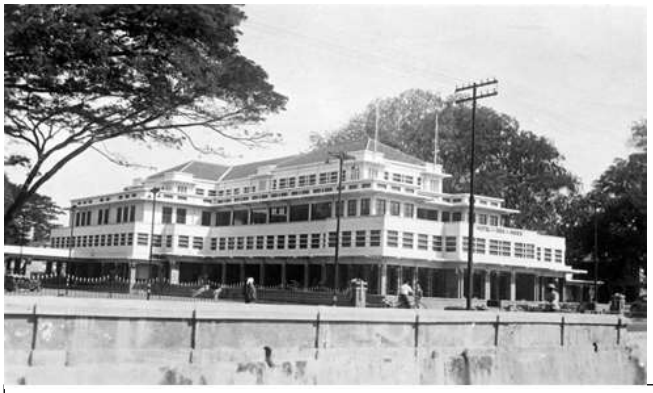
汚い泥水の中で遊び、大声で叫んでいるのはだいたい８～１６歳くらいの男の子だ。かれらは一糸まとわぬ全裸である。女性は大人から少女まで慎み深く、たいていサルン sarung を使って胸から下を隠している。

ヨーロッパから来たばかりのわれわれ三人がもっと驚いたのは、運河の中で展開されているそんな光景に、付近を通行しているヨーロッパ人トアンやニョニャ、お嬢さんがた、教養あるひとびと、華人やプリブミに至るまで、だれひとりとしてそれに注意を向け、不快な表情をし、口汚く侮蔑の言葉を罵るような者がいないということだった。

この天国のような土地には、ひとびとの間に素朴で純粋な慣習がまだまだ残されているのだ。ところが夜が来ると、バタヴィア住民もヨーロッパの大都市と同じような顔を見せる。レイスウェイクの道路脇に街娼が立って、客を待っているのである。

トラムがレイスウェイクを通り過ぎる間、車掌頭は目立つ建物を次々に教えてくれた。ホテルがあり、レストランがあり、内務省、総督宮殿、法務省、と白亜の壮麗な建物が目白押しだ。

レイスウェイクにあるホテルの中では、ホテルネーデルランデン Hotel der Nederlanden が特に印象的だった。車掌頭が言うには、このあと通るモーレンフリート西にあるホテルデザンド Hotel des Indes の方がレイスウェイクのホテル群よりモダンで美しいそうだ。



Hotel des Indes in 1931
<出典
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:COLLECTIE_TROPENMUSEUM_Hotel_des_Indes_Batavia_TMnr_10017556.jpg>

レイスウェイクの豪奢な建物群ばかりか、運河の向こう側のノードウェイクにもヴィラ・カフェ・店舗が並び、このバタヴィア随一の繁華街は贅沢で優雅な高級感に満ち溢れている。加えてこの通りを往来しているひとびともそれにふさわしい雰囲気を漂わせていて、バタヴィアのトップエリアを名実ともに充実させている。われわれはこの地区が大いに気に入った。

制服に身を包んだ御者が走らせている高級馬車、将校、住民、ひとりで騎乗している女性、色とりどりの服装のプリブミ、中華風衣装の華人。「ここは素晴らしいな」とヘンドリック。「汗をかかなきゃ、もっといい」とヘルメットを脱いだティマースマが応じた。ティマースマはときどきヘルメットを脱いで汗を乾かす。

「それは健康であることの証明だ。」と車掌頭が言った。「この東インドで汗をかかないというのは、身体のどこかがおかしいんだ。病気なんだ。だから東インドでは、汗をかくことは健康のバロメータになっている。」

われわれは、夜になったら北側のノードウェイクを歩いてみようということに衆議一決した。車掌頭もぜひそうするように勧めた。

　ハルモニ社交場の向こう側を南北に走っているレイスウェイク通りにはフランス地区がある。フランスのテーラー、床屋、変人たち・・・・

　いよいよ有名なハルモニ社交場だ。外見からはまるで劇場のような印象だ。東はトーキョーから西はボンベイまでの間で、ここがナンバーワンのクラブなのだそうだが、われわれは外から眺めるしかできない。建物はたいして背が高いわけでもなく、おまけに大通り沿いぴったりの場所にあり、ほんの小さい庭園がベンチで飾られている。

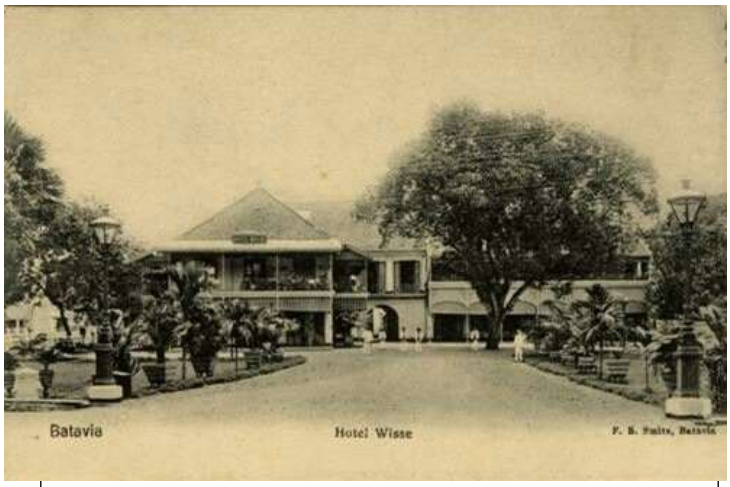
　車掌頭の話によると、クラブメンバーはほとんどが実業家と政府高官で占められているとのことだ。毎週日曜の夜7時から8時半まで、軍楽隊がガーデンコンサートを行っている。軍楽隊はその前の午後4時半から5時半まで、ヴァーテルロー広場で演奏してからここへ来るらしい。[続く]

「バタヴィア紀行（１０）」（2020年06月28日）

　西向きに走って来たトラムはここで右に曲がり、橋を越えてからモーレンフリート西沿いを北上する。そこはカンプンプトジョ Kampung Petojo で、騎馬隊の営舎が設けられている。橋の向こうの道路沿いにはエイヘンヘルプ Eigen Hulp の店がある。運河の反対側、ノードウェイクとモーレンフリート東の角地に大きい建物がある。ベランダに椅子が置かれていて、ヨーロッパ人の大人や子供がリラックスしている。車掌頭に尋ねると、ホテルヴィッセ Hotel Wisse だと答えた。

ほどなく、トラムの左側に広い公園があってブリギン beringin の巨木が木陰を作っている。その奥に大きい建物があって広いテラスに椅子が並べられており、建物の左右の通路に沿って更に奥の方にバンガローが並んでいる。これがホテルデザンドだったのだ。

このホテルの裏はプリブミのカンプンになっている、と車掌頭が言う。このホテルが東インドで最大最高級のホテルなのだ。「このホテルは高いと言われているけれど、東インドの金持ちにとってはそんなに高いというほどじゃない。部屋の種類や大きさで値段は違うが、一泊だいたい6～10フルデンで、食事が込みになっている。一泊が17フルデンくらいかかるシンガポールと比べてごらん。」



Hotel Wisse
<出典 https://id.pinterest.com/pin/795589090395822961/>

確かにバタヴィアのホテルは高くない。皮肉屋バス・フィート Bas Veth はホテルヴィッセが最高のホテルで、しかも一泊わずかに5～7．5フルデンだと書いている。ホテルヴィッセは美しく作られている。レイスウェイクにあるグランドホテル Grand Hotel Java やホテルネーデルランデンも建物のデザインは優れている。ただし、それらのホテルは懐古趣味の客にぴったりだろう。

経済的な宿泊を求めるひとには、モーレンフリート西にあるホテルモーレンフリート Hotel Molenvliet やホテルオルツ Hotel Ort、あるいはモーレンフリート東のホテルトラムズィヒト Hotel Tramzicht などがある。料金はひとり一泊3．5～4．5フルデンだ。

Hotel Nederlanden
<出典 https://en.wikipedia.org/wiki/Hotel_der_Nederlanden>

タングラン方面に向かうガンシャウラン Gang Chaulan（今の Jl KH Hasyim Ashari）を通り越すと、ペンションスハウロット Pension Schauroth の隣に公共事業省、そして東インド鉄道局がある。この通りは週日だとたいへんな賑わいだが、日曜日は何もない、と車掌頭が言う。週日には道路もトラムも、コタに向かうひとたちでいっぱいになる。路上には自転車やサドや徒歩のひとびとがあふれる。午後一時の昼休みになると、プリブミの使用人たちがトアンのための弁当を持って、トラムや徒歩でコタに向かう。夕方5時を過ぎると、そのトアンたちがヴェルテフレーデンのわが家に帰るために、逆向きの道路が混雑する。

ただ、この辺りのエリアは住むのに適していない。交通の大動脈のすぐそばで、おまけに家屋は密集しており、オランダ人の奥さんは気が狂うかもしれない。ゆったりした広い家に住み、表の道路とは前庭で離され、隣とは十分なスペースで隔てられ、爽やかな空気がほどよく循環する健康的な家に住まないで、東インド生活が成り立つわけがない。

モーレンフリート東には白塗りの大きいヴィラが玄関テラスを抱えて緑あふれる前庭の奥に並んでいるが、西側は住宅密集地区で店舗や住居が道路沿いに並んでいる。たいていの店舗はプリブミ・華人・インド人の店で、だいたい汚く、雑然としている。華人の入歯屋、プリブミの時計修理屋、アラブ人の皮革販売店等々がひしめいているのだ。

「あれがムラユ劇場 gedung komedi Melayu だ。」モーレンフリート東とプリンセン通り Prinsenlaan（今の Jl Mangga Besar Raya)の角地にある建物を車掌頭が指さした。そのマンガブサール地区には検察庁長官や

法務省高官からプリブミ下級官吏などが住んでいる。車掌頭が指さした建物は巨大なテント様のもので、竹編み壁に屋根はルンビアの葉で葺かれている。

「あそこは絶対見に行かなければいけない。廉いし、芝居はみんな結構笑わせてくれる。ヨーロッパ人は滅多に見に行かないが、シニョ sinyo やノニ noni は大勢やってくる。かれらはだいたい家にいてもすることが何もないから。」[続く]

「バタヴィア紀行（１１）」（2020年06月29日

この劇場は後に立派な恒久的建物に建て替えられ、タリア Thalia という名称が付けられた。出し物は地元プリブミや華人向けの演劇やオペラで、ローカルの劇団が上演した。芝居見物にやってくるのはプリブミや中華系・インド系・アラブ系の一般庶民が大多数を占め、プリマドンナが生まれては消えて行った。千一夜物語など古いペルシャの題材を主に扱った芝居がコメディスタンブル Komedie Stamboel と呼ばれて大衆の人気を集めた。

ムラユ劇場を超えて少し行くとモーレンフリートが終わる。その北側に巨大な建造物が恐ろし気な姿をさらしているのが見えた。「あれがグロドッ Glodok だ。さっき見た強制労働の囚人たちはあそこから来てるんだ。」と車掌頭が言う。その時代、グロドッと言うだけでグロドッ刑務所を意味する用法があった。

トラムの左側にはスラムのようなグロドッ広場 Glodokplein があり、兵士や水兵がかび臭い華人の飲み屋でとぐろを巻いているのが見える。そこでは自家製のアラッ arak が売られていて、廉価だが健康には有害なものが混じっている。

プリブミがプチナン pecinan と呼んでいるバタヴィアの下町華人街を見て回るには華人地区の最前線に当たるグロドッから始めるのが順当だから、われわれは車掌頭に謝辞を述べてから、このグロドッ広場停留所

でトラムを降りた。広場の左側は華人の飲み屋、アヘン吸引所、廉価ホテル、種々の店などが並んでいる。廉価ホテルのオーナーはたいてい日本人や華人だ。

われわれはこの辺りを周遊するためにサドを雇うことにした。近くにいたサドの兄ちゃんはわれわれの意を理解したように見えたが、先に金を払えと言っているようだ。どうやら、兵士は信用されていないのだろう。１センコインを数枚、兄ちゃんの手に握らせたら、にっこり笑って御者台に登ったから、われわれもすかさず車に乗った。わたしは御者の隣で前向きに座り、ヘンドリックとティマースマは後で後ろ向きに乗った。御者が馬に数発鞭をくれると、馬は歩き出した。

サドはグロドッ広場の右側を行く。華人の店舗、狭い道、古ぼけた運河。ここの華人街の風情はわたしの育ったアムステルダムのヨルダアン地区を思い出させてくれる。狭く曲がりくねった道は果てしなく続き、運河沿いに立木が並んでいる。ここに住んでいる華人は2万人超だそうだ。賑やかで、活気にあふれている。独特の中華風建物の窓や扉から、建物の中に飾られている祭壇が見える。祭壇の両側には、金色で書かれた漢字の並んでいる赤地の長い紙、祭壇の上には種々の色で描かれた絵が吊るされている。絵はふたりの衛士を従えた大伯公 Toapekong [6]だ。衛士は赤い顔と黒い顔をしている。祭壇には赤く太いローソクと線香、そしていろいろな物が置かれている。

華人は飲食・売買・口論・喧嘩・化粧・散髪・料理・油揚げ物などを路上で行っている。

そこに歩行者が入り混じった上に、その間を縫うようにしてサドが通り、荷車が通る。それはたいへんに面白いショーでもある。ただ、そこに漂っている匂いは、われわれの忍耐力を超えていた。すさまじい臭いを放つトゲのある果物から、大根、そして焙った豚肉。アムステルダムの放浪者だったわたしにも、華人の食べ物の匂いになじむことは絶望的であるように思われた。

隣に座った御者は残念なことに、オランダ語を一言も知らない。わたしが何か尋ねても、かれはただ笑うだけだ。かれの痩せ馬を鞭打つ勢いは強く、わたしは不運なその生き物がかわいそうになった。わたしの目

---

[6] 金徳院 (Jl. Kemenamgan III, Petak Sebbilan No. 19, Jakarta)の事か？大伯公は Ancol にある Vihara Bahtera Bhakti(安卒大伯公廟)のことだろう。

から見て、そんなに強く打つ必要はないように思えるのである。おまけに膝の位置が快適でなく、ヘルメットは車の屋根につかえていて、そこに座っているのがだんだん苦痛になって来た。

サドは小さい運河をまたぐ跳ね橋を通過し、運河に接して建てられている古い中華風住居の並びがわたしの目に映った。アムステルダムの貧民街が思い出されて、感傷的な痛ましい気持ちになった。

グロドッ中華街に入ってからというもの、バタヴィアで警官の補助役 opas を務めているプリブミの姿をほとんど目にしなかった。ただ、だらだらぶらぶらしているようにしか見えないオパスの姿は実に珍妙で、よく目立つのだ。真っ黒なウール様の生地でできた制服に大きな黄色い徽章を付けているため、バタヴィアではカナリア鳥 burung kenari と呼ばれている。[続く]

「バタヴィア紀行（１２）」（2020年06月30日）

その衣装のセンスときたら、まるでまともとは思えない。いったいだれがあんなものを考えて、世の中にそんな姿でかれらを出現するようにさせたのだろうか。東インドに来てからプリブミが着ているいろいろな制服を目の当たりにしているところでは、概して美的センスは最悪だ。もちろん、プリブミが自分でそんなことを決められるはずがないから、だれがそれをさせているのかは言わずもがなだろうが。

プリブミだけでなく地方行政府役職者の日常用の制服にしても奇妙な風体だ。みんなポーターの帽子をかぶっている。東インドにいるヨーロッパ人も概して服装のセンスが悪く、中にはまるでベーカリー職人かコックのようにしか見えない者もいる。

そんなことを考えていると、突然わたしの名を呼ぶ声が聞こえた。声の主を目で探していると、人混みの中からネーデルランド号の水夫長アブドゥラが姿を現した。われわれはこの邂逅をよろこんだ。

ネーデルランド号はわれわれが降りたあとスラバヤを往復し、数日後にはこのバタヴィアからまたオランダに向けて出港する予定になっているというアブドゥラの話で、この邂逅が一層の奇遇であるようにわたしには思えた。

Kali Besar 1910-1920
<出典
ttps://commons.wikimedia.org/wiki/File:COLLECTIE_TROPENMUSEUM_Handelsmaatschappijen_langs_de_Kali_Besar_in_de_Chinese_wijk_van_Batavia_TMnr_10015108.jpg

プリブミの服装のアブドゥラは洋服を着ているときよりも雄々しく見えた。アブドゥラがこの中華街を案内してくれることになり、サドをもう一台雇って二台で巡ることになった。二台のサドはプチナンからクレイネポート Kleine Poort へやって来た。左に折れて橋を渡ると、そこが有名なカリブサール Kali Besar だった。古い歴史を持つバタヴィア城市の中央を分断するカリブサールの両岸は、VOC以来のオランダ人商業地区である。

しかしわたしの眼前に横たわっている過去の栄光を背負ったこの地区の光景に、わたしは落胆してしまった。すべてがきたなく汚れ、ペンキはあちこちがはがれ落ち、建物は崩壊に直面している。まるでぼろぼろのスラム地区だ。ヴェルテフレーデンの清潔で美しい邸宅で暮らしているトアンたちが、このバタヴィアの中心的商業地区をこのように放置している気持ちがまるで理解できない。

われわれはカリブサールの東と西を巡った。大型の商事会社や海運会社の事務所に混じって、諸外国の領事館もある。汚い印象に埋もれてよく見えなかったが、近くで見ると華やかなりし往時を彩ったと思われる芸術的な像や置物がそこここに見られる。アブドゥラの話では、建物の中は東インド産のたいへん美しい大

理石で作られた床がいまだに使われているそうだ。しかし中がどれほど美しかろうと、外がこれでは意味がない。

カリブサールの北端にある跳ね橋をわれわれは渡った。スタッツポート Stadspoort 近くのカスティル広場 Kasteelplein にわれわれは着いた。トラムの線路が走っており、停留所がある。そこがトラムの終点なのだ。スタッツポート別名ピナンポート Pinangpoort はクーンが作ったバタヴィア城市を囲む城壁の跡地にある。かつてそこは、VOC役人や商人たちがイギリス銀貨プラフテン plachten を集める場所だったとのことだ。昔のイギリス銀貨には黄金が混ぜられていたそうだ。門を通ると、広い穏やかな道路の両側には古い倉庫が並び、バタヴィアの歴史を全身で感じ取ることができる。

アブドゥラはサドを止めると、左の方へわれわれを徒歩に誘った。そこには大きい大砲が横たわっていた。これは神聖な大砲だ、とアブドゥラは説明する。「プリブミはこの大砲にお供え物を置き、聖なる霊に祈りを捧げる。」

確かに大砲の周りをたくさんの飯・果実・花などが取り巻いているではないか。この古いポルトガルの大砲は子供を授けてくれると信じられていて、プリブミ、印欧混血、華人などの、子供がまだできない婦人がたくさんお参りにやって来る。大砲が参詣者の祈りを聞き届けてくれれば、ほどなく妊娠するそうだ。

Si Jagur 砲
<出典 https://id.wikipedia.org/wiki/Meriam_Si_Jagur>

この大砲の砲身の後側に親指を人差し指の下から突き出して拳を握っている像が付いており、それがセックスを意味していることから児作りのシンボルとされたように思われる。セックスと児作りとの密接な関連性は、東インドの伝統文化の中にあったものなのだろうか？[続く]

「バタヴィア紀行（13）」（2020年07月01日）

大砲を見学したあと、われわれは更に北に向かった。跳ね橋を渡った少し先に埠頭がある。そこはカリブサールの北端にある幅広い運河の岸で、運河は更に海に向かって流れ去って行く。埠頭には小舟や小型帆船、蒸気船などが係留されている。しかしその一帯は廃墟にしか見えない。使われていない建物は今にも崩れ落ちそうだ。

跳ね橋　Jembatan Kota Intan 1900-1940
<出典 http://www.indonesia-dutchcolonialheritage.nl/Touring%20Jakarta,%20colonial%20style%201/4.pdf>

スタッツヘルベルフ Stadsherberg と書かれた看板があったが、そこに建物は何もない。かつて、ここにはバタヴィア港があった。オランダからやってきた大型船は沖合で投錨し、乗客と貨物ははしけで運河を通ってこの埠頭までやってきた。そのまま街中へ移動するための乗り物が得られなかった乗客は、スタッツヘルベルフで一泊せざるを得なかった。同じように、バタヴィアからオランダに向かう乗船客も、大勢の親類縁者に送られてここまでやって来ると、はしけに乗れるまでの時間をスタッツヘルベルフで過ごし、送別の宴が催されてから送り出されたりした。

埠頭の対岸には魚市場 Pasar Ikan があり、毎日早朝からおおいに賑わっている。だがわれわれはそこへ見学に行くのをやめた。悪臭のものすごさは十分に想像がついたからだ。するとアブドゥラはわれわれをイスラム教モスクに案内することにした。

バタヴィア最古のモスクであるこのルアルバタンモスク Mesjid Luar Batang の中にわれわれが入って行くことについて、小さくない気おくれを抱いたが、アブドゥラは何も問題はないと言う。もちろん、中に入るに際して靴を脱がなければならなかった。

東インドのムスリムがもっとも敬愛するモスクがここだそうだ。建物全体がシナゴーグのように閉ざされている。建物に向かう小さい道の脇には乞食が並んでいて、「ミンタドゥイッ Minta duit、トアン」の合唱を聞くことになる。やせた不潔な男たちの中には、盲人もいる。この乞食の隊列がまるで閲兵式の兵士のように整然と並んでいるのに驚かされた。われわれ全員は、アブドゥラがした通りを真似て、それぞれが1センをかれらひとりひとりに与えた。

中にいるムスリムたちは一心に礼拝の所作を行い、精神を集中させている。われわれはアブドゥラに、「われわれは待っているから、あなたも礼拝していいよ。」と勧めたところ、かれは不愉快そうな顔をした。どうやら若い世代は、サントリを除いて一般に宗教ごとにあまり熱心でなく、年老いて土の匂いがするようになってくると、宗教に熱心になるようだ。

われわれはピナンポートに待たせてあるサドの方に戻った。御者たちは巡回物売りから何かを買って食べていた。この巡回物売りは街中であろうが郊外であろうが、人間がいるすべての場所に出没する。まずほとんどすべてがプリブミであるかれらにとってのベストは、人通りが繁華で大勢が買ってくれる場所に腰を据えることだが、そんな幸運が得られる者は数えきれないほどいるかれらの数パーセントにすぎないだろう。そうなると残りの者は客を求めてあちこちを徘徊することになる。

かれらが売っている商品はさまざまで、やはり食べ物が一番多く、他にはほうき・ひしゃくなどの日用品、あるいは子供の玩具といったものをよく見かける。路上で飯・野菜・サンバル・卵・肉・魚・揚げバナナ・茹でバナナ・温かく甘いコーヒーなどがいつでもほんの数センで手に入るのだ。他の物売りはレモネードや氷、切った果実などを売っている。かれらはけっこう清潔に食べ物を取り扱っているように見えるから、わたしはこの巡回物売りのお得意さんになってしまった。

御者たちはわれわれが近寄って来たことに気付かず、一心不乱に食べていたから、わたしはいたずら心を起こして物売にかれらの飯代を払ってやり、サドに飛び乗った。御者たちは驚いて食べるのをやめると、すぐ御者台に登った。アブドゥラが「グドンビチャラ Gedong Bicara へ行け。」と命じた。

サドはおよそ15分後にスタッドハウスプレイン Stadhuisplein[7]に着いた。そこにあるバタヴィア市庁舎 Stadhuis がバタヴィア庶民が言うところのグドンビチャラである。どうしてグドンビチャラかと言うと、バタヴィアのプリブミや外来東洋人の住民がVOC高官に直接話ができる場がそこに用意されていたからだ。[続く]

「バタヴィア紀行（14）」（2020年07月02日）

VOC時代のバタヴィア城市が市政評議会 College van Schepenen によって統治されていた時代に、統治機関がこの建物で執務していたことからバタヴィア市庁舎と呼ばれている。

既にバタヴィア市庁舎がヴェルテフレーデンに移っている現在では、市民管理庁 Binnen-landsch Bestuur として旧市街の行政機構と警察がそこを使っている。この建物の正面広場には死刑のための処刑台が常設されていて、時おり凶悪犯罪者の処刑が公開されている。建物の地下にはVOC時代以来の牢獄がある。

広場の東側にある美しい円柱で飾られた建物は高等裁判所 Raad van Justitie だ。広場の北東角には鉄道会社NIS(Nederlandsch Indische Spoorweg Maatschappij)のバタヴィア駅がこじんまりと立っている。

われわれはトラム線路沿いにビンネンニューポートストラート Binnennieuwpoortstraat（今の Jl Pintu Besar Selatan）を南下した。日曜日のこの道路には人っ子一人いない。われわれはここでも、ヨーロッパ人所有の古く汚く、壊れかかっているような建物群を目にした。「汚い場所だ。」というティマースマのコメントに、われわれはみんな賛同した。

---

[7] 元バタヴィア市庁舎。現在の Fatahillah 広場・ジャカルタ歴史博物館

左側に政府所有の郵便局があったが、この建物もひどいありさまだ。右側は東インドエスコント銀行 Nederlandsch Indische Escompto Maatschappij だ。大型資本のしっかりした銀行だが、こんな場所まで金を預けにヴェルテフレーデンからやってくる人間があるとは信じられない。この銀行は別の場所に店を移すべきだろう。

この通りはまったくひどい場所で、バタヴィアにこんなスラム地区があるなどとは信じがたい話だが、もっと異常なことは、この通りの腐ったような建物群に何トンもの黄金が保管されているのである。

この通りを外れた辺りに華人のさまざまな作業場があって、家具や家庭用器具を生産している。日曜日だというのに、やせた身体の作業者は上半身裸で骨を折っている。かれらは辮髪を巻き上げ、愚者のような顔つきで、一心に物作りに精を出している姿を見せている。

われわれはどんどん南下してモーレンフリートの端までやってきた。遠くにグロドッ橋が見える。やってくるとき通ったトラムの線路を逆行するのはつまらないから、逆戻りすることにした。再度、華人のさまざまな作業場の前を通過する。作業場は道路より低くなっていて、作っている製品がよく見える。

ビンネンニューポートストラートをまた通る気はないから、南バタヴィア駅の手前で右に曲がった。南バタヴィア駅はNISとは別の鉄道会社SS(Staatsspoorwegen)が所有している。トラムはまた別の会社が運行させていて、はなはだややこしい。

南バタヴィア駅の南側を東西に走っている道路をしばらく行くと、道路は右に分岐してヤカトラヴェフ Jacatraweg に入る。その角地に1693年に建てられたポルトガル教会 Gereja Portugis が建っている。プリブミが Gereja Kota Lama とも呼んでいるもので、オランダの田舎町の質素な教会に似ている。ミサが終わったばかりらしく、扉が開いているので、われわれは立ち寄ってみることにした。肌が褐色のヨーロッパ人がわれわれを迎え、中を案内してくれると言う。

オランダ人がジャワ島にやってくる前、ジャワには既にポルトガル人がいた。かれらはポルトガル女性を連れて来ず、奴隷を買い、女奴隷を伴侶にした。その子孫はいまだにジャワ島にいる。印欧混血の男の子や若者、時に男性一般を指すこともあるシニョ sinyo という言葉はポルトガル語の signor に由来している。東インドの印欧混血ファミリーの間でポルトガル系の姓は決して稀なものでない。その傾向は特にマルク地方、中でもアンボンできわめて顕著であり、マルクではポルトガル系混血ファミリーが既に十二分に土着化していて、原住民からヨーロッパ人と見られていないほどの溶け込み方になっている。最初かれらはオランダの侵略に手を携えて抵抗したが、最終的にオランダの支配下に落ちた。

東南アジアで当初、卑俗化したポルトガル語が共通語の役割を担ったのは、ポルトガルが各地に領有した町でのポルトガル人の地元社会への溶け込み方と無縁でない。そんな町の住民が奴隷に買われて別の町に移住し、その言葉が四方八方へと広がっていった。[続く]

「バタヴィア紀行（１５）」（2020年07月03日）

バタヴィアでは、キリスト教徒になるのを条件にして主人が奴隷を自由人に解放することが行われた。現代まで残っているポルトガル系コミューンはタンジュンプリオッの東側で海からすこし南下したところ[8]にある。

ポルトガル系コミューンでは普通、混血子孫たちは地元プリブミ社会と自分たちの間に人種格差観念を抱かず、また王制貴族制社会支配の経験も持たなかったために、周辺プリブミ社会と容易に溶け合って存続し続けた。

とは言っても、ファミリーによっては、祖先が何だった、先祖にだれがいた、などということを根拠にしてその子孫としての尊大さをまき散らす者が皆無というわけでもない。その種の愚者はいつの世にも、どこの土

[8] Kampung Tugu

地にもいるものなのだ。ジャワ島で見つかるその種の人間はたいてい、アンボン出身のポルトガル系だそうだ。

ポルトガル教会の中はたいへんアンティークな雰囲気だ。彫刻のなされた説教台と背もたれの頂点が銀色に塗られた高椅子は美しい。月々の費用はポルトガル政府から出ているが、不足分は密輸品の売買で補っていると案内人は物語った。教会の壁には1695年10月23日開設と記され、オルガンは18世紀末の神父が寄贈したものだ。たくさんの椅子はファン・デル・パッラ van der ParraVOC総督の寄付だそうだ。

教会の周囲は墓だらけだ。教会の庭に埋葬されるのは政財界有力者であり、1725年に葬られたスワーデクローン ZwaardecroonVOC総督もそこに混じっている。

教会を出てヤカトラヴェフを下ると、きれいに保たれている白い塀があり、中央にセメント造りのモニュメントが建っている。モニュメントの上には槍の穂先が突き出ていて、その穂先にドクロが突き刺さっていた。これが1722年にバタヴィアのVOCに対する謀反の首謀者として処刑されたピーテル・エルベルフェルド Pieter Erberveld の頭蓋骨だった。

話では、ピーテルが諸方面の不平分子を集めてバタヴィアのVOCやバンテンあるいはソロ・ヨグヤのスルタン国を滅ぼし、全ジャワ島の支配者になろうと計画していることを知ったプリブミ娘が、恋人のVOC士官にその話を教えたためにヤカトラヴェフのこの家で捕物劇が行われ、ピーテルとプリブミの謀反計画者らが大勢逮捕された。

われわれがそのモニュメントに書かれた碑文を読んでいるとアブドゥラが、遅くならないよう、そろそろ兵舎に戻った方がよい、と忠告してくれた。われわれはヤカトラヴェフを下ってグヌンサハリ通りに入り、そのままスネンまで行くことにした。

グヌンサハリ通りには道路の西側にまっすぐ北上している狭い運河があり、通りは閑散としていて、めったに通行者はいない。ヴェルテフレーデンに近づいてくると、道路の東側には広い庭に囲まれた白塗りの邸宅の並びが出現した。路上の往来はまばらで、雰囲気は穏やかだ。

スネン市場のかなり手前で右に折れ、橋を渡った。ヨーロッパ人刑務所があり、軍事裁判所がある。左の方にデパイプがあって、昨夜月光の下を通った広場があり、盛装したひとびとで賑わっているコンコルディア社交場が見えた。美しい大理石のフロアの上でひとびとはダンスに興じているのだろう。

ほどなく兵舎に着いたので、アブドゥラがサド料金の精算を手伝ってくれた。一時間60センだそうだ。われわれはひとり1フルデン払うだけで事足りた。夕方のヴァーテルロー広場での演奏会でまた会おうとアブドゥラと約束してから、われわれは兵舎に戻って昼食を摂り、夕方まで昼寝した。

ヴァーテルロー広場では、数人の男性が乗馬の腕前を披露している姿が見え、中にヨーロッパ婦人を乗せた馬車が何台もあちこちでゆっくりと広場の中を移動している。

草地の上では、軍楽隊が各自の譜面台を前にして、大きな円を描いて立っている。その円の周りを白服の将校から下士官や兵士たち、熱帯用の軍服を着用した水兵、そしてまたプリブミや華人、ほっそりした体つきをしている美人のノニたちも入り混じって取り巻いている。[続く]

「バタヴィア紀行（１６）」（2020年07月04日）

その群衆の中で、新鮮で赤みがかった頬をしている兵士はわれわれと一緒にヨーロッパから来たばかりの分遣隊兵士であることがすぐに分かる。ノニたちの目にもそう映っているにちがいない。かの女たちは新来の兵士に関心を注ぎ、優しい微笑みを向けて来る。

軍楽隊の演奏はすばらしい。ヨーロッパで流行っている曲を演奏してくれる。東インドの専従などと言わずに音楽だけを聴いていれば、ヨーロッパから来たのではないかと思えるくらいの力量だ。

そよ風が吹き、空気がすこしひんやりしてきた。数人の水兵が音楽にあわせて踊り出す。5時半ごろ、太陽が沈み始めた。軍楽隊は演奏を終えて、移動するために楽器の片付けを始める。すると兵隊や水兵たちはデパイプに向かって歩き出した。
マンドルに指図されてケッティンヨンヘンが譜面台を片付け、荷車に載せている。兵士がひとり、その作業を監督している。印欧混血の青年男女たちの多くはヴァーテルロー広場の北西にあるローマ教会に向かった。しばらくして六点鐘が鳴り渡った。

アブドゥラとわれわれ三人は広場から北東に向かった。ヴェルテフレーデン軍人シアターを越えて、道路の向こうにあるパサルバル De Nieuwe Markt を訪れるのだ。

パサルバルは道路の端から端まで商店が並んでいる。十軒中九軒の店は華人の所有で、残る一割が日本人やインド人のものだ。コタの華人商店街と同じように、店は道路にそのまま面していて、前庭はない。建物はヨーロッパ風と中華風が混在していて、雰囲気はコタの華人街とまた異なっている。

この通りにバタヴィアの華人マヨール Mayor Cina が住んでいる。その公的役職名称は華人コミュニティのリーダーを意味しており、オランダ植民地政庁が与えるもので、その役職に就くためにかなりの金額を政庁に納めなければならない。

マヨール、カプテン Kapten、レッナン Letnan などという軍隊の階級に似せて用意されている役職は、行政からのいろいろな仕事が要請されることになるのだが、華人はそういう役職に金を納めてまで就くことを喜んで行っている。おかげて、カプテンやレッナンの役職者は大勢いる。アラブ人コミュニティにも同様にこの制度がある。政庁側がその役職を与える条件はもちろん金があることが筆頭だが、人格的に優れていてコミュニティで人望があり、コミュニティに対する統率力が備わっていることが重要な条件だ。

レッナンの下には地区長 wijkmeester という役職まであるそうで、華人コミュニティの自治制度は十分細かいところまで秩序立てられている。

パサルバルの華人マヨールの邸宅は美麗な中華風建築で、表には濃赤色の大きな提灯が二つ掲げられ、中の玄関テラスはやはり赤い小さめの提灯で飾られている。邸内を見ることは叶わなかったが、一見した印象は美麗に贅を尽くしたものだった。

パサルバルは朝から夜までいつも賑わっている。サルンとクバヤを着たヨーロッパ人や印欧混血のニョニャたちが路上を埋め、その間を多数のサドが通行している。たいへん稀な商品を探しに来ても、たいていどこかの店でそれを見つけることができる。インド人の店で有名なのは Wasiamull Assomull、華人の店で客の多いのは Tio Tek Hong、日本人の店ではやっているのは Firma Nipponkang & Co.。

パサルバルにいる華人はたいていが印華混血の子孫で、新客 sin-khek と呼ばれる新来華人よりもこざっぱりしていて態度に余裕があり、落ち着いているものの、勤勉さの点では負けている。新客は口喧しいので、かれらが複数集まればその騒々しさは人間わざと思えないくらいにうるさいが、混血子孫はそんな喧しさがない。混血子孫の話すムラユ語は響きの良い言葉に聞こえる。また往々にして、オランダ語や英語も堪能だ。

印華娘たちは黒く光る薄い生地の服を着ているが、下はパンタロンだ。オランダのアジア物産店によくある黄色い人形に生き写しだ。かの女たちは歩道をだらしなく歩き、喧しい声でしゃべりまくる。[続く]

「バタヴィア紀行（１７）」（2020年07月05日）

われわれはまた運河の方にもどり、橋を渡って運河沿いの道を歩いた。道路の向こう側には郵便電信局がある。その道を水門橋に向かって歩いた。この辺りの、白く塗られた小さめの家屋の並びを見て、イタリア南部にある町の光景を思い出すひともきっといるはずだ。

ここの住民はヨーロッパ人やインド人で、肌の真っ黒な床屋もいる。われわれは水門橋を越えて、商店の並びまでやってきた。そう、ここがノードウェイクだ。今朝トラムで通ったレイスウェイクは道路と運河の向こう側にある。

ここの方がパサルバルより広くて開放感があり、大きく息が吸えて気持ちがいい。この地区にいるのはたいていヨーロッパ人の男女だ。かれらは高い場所に上がってお互いを眺め合っている。

日曜日の午後7時から8時半までハルモニ社交場で演奏会が開かれるので、その前と終わった後の時間帯はひとびとがレイスウェイク通りやノードウェイクの商店に続々とやってきて、たいそうな賑わいを見せる。一方、バタヴィアの他の繁華街は、日曜日の日没後は火が消えたようなありさまになる。van Stam & Weyns や Rikkers あるいは Versteeg などのポピュラーなカフェやレストランもまばらにしか客が入らない。日曜日の夜はまるで、レイスウェイクとノードウェイクが全バタヴィアで唯一のナイトスポットになったかのような観がある。

週日の夜はもちろん、バタヴィアの各所にある贅沢なカフェやレストランが煌々たる電灯に照らされて賑わうのだが、ノードウェイクとてそれに負けず劣らずの勢いを見せ、おまけに日曜日の夜には全バタヴィアの客を一手に集めてしまう。

ここにある商店は、商店としての構造で建てられているものばかりでなく、ヴィラが商店として使われているものもある。贅沢感に差が付くのは否定できない。夜になると、ノードウェイクの商店はひとつの例外もなく店開きする。だが午後1時から4時まではどの店も閉まっている。

路上では、夜だというのに賑やかな往来だ。豪華な個人の馬車、ホテルの馬車、サド、レンタル馬車会社 Eerste Bataviasche Rijtug Onderneming 所有の幌付き馬車は EBRO と呼ばれている。そして四輪自動車・二輪自動車・自転車までもが、ノードウェイクとレイスウェイクの路上を通行している。

カフェの表では、男女数人のグループがリラックスして話の花を咲かせている。夕方になるとバタヴィアの女性たちは精一杯着飾り、ヨーロッパで最新流行の香水を振りかけて外出する。パリ直送の香水は言うまでもなく、とても高価だ。男性は夜も白い軽装の姿が多い。たいていヨーロッパの夏の服装をしている。

われわれはノードウェイクを西に向かって歩いた。東インド商業銀行 Nederlands-Indische Handelsbank とオランダ通商会社ファクトリーFactory Nederlandsch Handelsmaatschappij の前を通ったし、女子寮になっているウルスリンシントマリー修道院 Sint Mary Klooster もあった。そしてとうとうノードウェイクの西端までやってきた。右側はホテルヴィッセ、レイスウェイク側はハルモニ社交場だ。

ハルモニの左側の庭園がひときわライトの明かりで際立っている。建物入り口の脇に置かれた揺り椅子にひとりの男性が座って揺れており、かれの召使いと思われるプリブミが飲み物をトアンのために運んでいる。

われわれは道路を横切ってプトジョ地区に入った。レイスウェイク通り西側を南に向かって歩く。ここの建物はコタと同じように、密集している。右側にフランス人の店があり、隣には日本製の置物などを販売しているダンロップ Dunlop がある。その対面でハルモニの南に隣接している大きい店は Oost en West で、東インドの出来の良い手工物産を販売している。

このレイスウェイク通りに比較的新しく観光振興協会ビューローができた。東インドに観光にやって来るアメリカ人・イギリス人・ドイツ人は数多いが、肝心のオランダ人はあまりやって来ない。この通りは街灯が十分に明るかったが、通りを越えてしまうと、タナアバンに向かう道は木がうっそうとしていてちょっと暗い。この道から右の小路に入って行くとヨーロッパ人墓地があり、その裏は首都防衛軍の射撃場になっている。

[続く]

「バタヴィア紀行（18）」（2020年07月06日）

われわれは EBRO[9]を雇ってコニングスプレイン[10]を一周することにした。エブロを呼ぶと、闇の影から三台が競り合ってわれわれの方に走って来た。あやうくぶつけられそうになったから、われわれは飛び退って除けた。腹が立ったから、われわれは一番後ろの車に乗ることにした。他の二台の御者は不満そうにムラユ語で何かを言ったが、われわれに分かるわけがない。かれらの愚痴を気にしないでもよいとアブドゥラは言うものの、われわれはそのふたりにそれぞれ20センを渡して引き下がらせた。ふたりは大喜びで去って行った。

広大な草地のコニングスプレインは神秘的な月光の下で浮き上がっているように見える。徒歩で回ったなら、一時間はゆうに超えるだろう。四つの角には公園があり、周囲はランドハウスに囲まれている。コニングスプレインの周囲を巡る広い道路は外側のヴィラの前庭を境界線にして、一直線に走っており、街路樹が植えられて、日中の暑さから日陰を作ってくれている。

プリブミはここをガンビル広場と呼んでいる。毎年ここでパサルガンビル Pasar Gambir が開かれ、８月３１日には数千人の群衆が集まってヴィルヘルミナ女王の誕生祝賀が催されて、花火が夜空を彩る。そのときは、だれでも参加できる楽しい競技や、首都防衛軍の行進パレードなども行われる。

ハルモニで演奏会が続けられている間、われわれはエブロでゆっくりとコニングスプレインを回った。「ここはなんて美しいんだ！」普段それほど上品でないティマースマが感無量の声でコメントする。アブドゥラを含めて、われわれ四人は月光の下の美しさに酔いしれ、騒がしい声をたてることもなく車上から周囲を眺めるのに没頭した。

わたしは神がこの東インドの地に与えたものに思いを馳せていた。そんな視点からものごとを眺めることはわたしにも滅多になかったのだが、このような形でひとの心を打たしめているこのできごとは、オランダにいればまず体験することはなかっただろう。アブドゥラはさておき、他のふたりも厳粛な気持ちの中に沈んで

---

[9] Erste Bataviasche Ritung Ondernemin 社所有の二輪辻馬車

[10] 現在の独立広場

いるようにわたしには見えた。われわれ三人はきっと、神とのつながりを思い出さずにはいられなかったのではあるまいか。

コニングスプレイン西の中央辺りに、美しい古代ギリシャ風の白亜の建物があり、表には銅製の象が高い台の上に飾られている。これがプリブミに象博物館[11]と呼ばれているものだ。これこそが世界に名高いバタヴィア芸術科学ソサエティ Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen の本部兼博物館及び図書館なのである。

ソサエティはVOC時代に発足したが、その後沈滞していたのをイギリス時代のラフルズ総督が活性化させた。われわれはイギリス人ラフルズに感謝しなければならないところだ。今やこのソサエティは世界で著名な学術団体になっている。

ソサエティは中部ジャワの古代ヒンドゥチャンデイの発掘調査などを行った。博物館の大展示場には東インドの全土から集められた遺物や芸術品で満たされている。いろいろな武器と防具、道具類、衣服、装飾品、織物、編み物、楽器、舟、家屋の模型、等々。それらのさまざまな品物は、この地に住むひとびとがそれらを作り出した能力を示すものなのである。更に博物館の宝物室には、傘、黄金製の甲冑、兜、冠、シリ箱、古来のクリス、槍などが収められている。それらは戦争で敵から奪った戦利品や盟友スルタンから贈られたものだ。チャンディの発掘調査で見つかった耳飾り、首飾り、腕輪などもある。仏教やヒンドゥ教のチャンディから発掘された石像のレリーフには、古代ギリシャ、エジプト、アッシリアなどのモチーフを見出すことができる。

アムステルダムのレイクスミュージアム Rijksmuseum すら持っていないロンボッ Lombok の貴重な遺物もある。その中には、千年以上昔のポワティエ Poitiers での戦争でフランク王国に敗れたモール Moor 人やサラセン Saracen 人が使った甲冑の金属の環がある。

---

[11] Mesium Gajah=国立博物館。Jl. Merdaka Barat にある。

一方ここの図書館は、東洋の諸言語や民族誌に関する書籍のコレクションが豊富だ。世界からたくさんの学術研究者がここを訪れる。建物内の理事会会議室には、17世紀以来の著名な探検家の画像が並べられている。[続く]

「バタヴィア紀行（19）」（2020年07月07日）

表にある象の銅像はシャムの王様が1871年にジャワを訪問した際の記念としてオランダ女王に贈ったものだ。その像の左右に大きい大砲が置かれている。もともとバンジャルマシン Banjarmasin のスルタンがマルタプラ Martapura [12]の王宮に置いていたものだ。

象博物館のすぐ隣はドイツ総領事の公邸で、表門にはドイツの国章が取り付けられている。東インドにやってきて植民地政庁の仕事に手を貸しているドイツ人はたくさんいる。本来ならオランダ人が担うべき職務であるにもかかわらず、ドイツ人は勤勉で熱心にそれらの仕事に精を出している。オランダ人の多くがいまだに、東インドは未開の野蛮国で虎や蛇がうろついているようなイメージを持ち続けているのだから、ドイツ人もここへ来るまでは同じような絵を見ていたにちがいあるまい。それを圧してやってくるのだから、かれらの勇気は見上げたものだ。植民地軍兵員を務めているドイツ人をわたしは何人も知っている。かれらはだいたい月額5百から8百フルデンを支給されているようだ。

コニングスプレイン西通りを南端まで下ると、素朴なアルメニア教会があり、西に向かう道路ガンスコット Gang Scott がある。アルメニア人というのは小アジアに興ったセム族のひとつで、ユダヤ人やアラブ人と関係を持ち、宗教はギリシャ正教だ。東インドにはギリシャ正教信徒がかなりの人数いて、植民政庁はそれをキリスト教と認め、信徒にはヨーロッパ人待遇を与えている。

---

[12] 南カリマンタンの都市

コニングスプレイン南を東行すると、ふたつの建物が注意を引く。ひとつは王立自然科学協会 De Koningklijk Natuurkundige Vereeniging で、この建物にはバタヴィア市議会も入っている。もうひとつはバタヴィアレシデン公邸だ。

東インドでレシデンは担当行政区域に対して大きい権力を持っている。行政機構はその下に副レシデン Assistant Residen 、更にその下に監視官 Controleurs、そして監視官補 Aspirant Controleurs を持ち、担当行政区内の統治を行っている。

レシデン公邸入り口の警備詰所には数人の武装警官がおり、白塗りポールには朝から夜までオランダ国旗がひるがえっている。コニングスプレイン南の東端角には電話会社 de Intercommunale Telefoon Maatschappij があり、バタヴィア～チルボン～トゥガル～プカロガン～スマラン～スラバヤを結ぶサービスを行っている。

コニングスプレイン東に曲がったあと、われわれは道路の向こう側に女子寮を備えたHBSがあるのを見た。そしてしばらく走ると、左側に真っ暗で侘しい鉄道駅があった。

「ついにここまで来たぞ。」とヘンドリックが声を出した。そう、われわれはタンジュンプリオッ港から列車に乗ってここまで来たのだ。駅の裏側にはバタヴィアバイテンゾルフ競馬ソサエティ Batavia-Buitenzorg Wedloop Societeit の広い馬場がある。大競馬大会は年二回開催され、たいへんな人出でにぎわう。マラッカ海峡沿いに住んでいるイギリス人もたくさんやってきて、レースに参加したり、見物したりしている。自分の馬を運び込むひとも少なくない。

「教会を見てみろ。」とティマースマも声を出す。駅の対面にあるヴィレムスケルク Willemskerk だ。そしてその北側に軍司令官官舎の円柱も見える。それらを通り過ぎ、ベオス～バイテンゾルフ間鉄道線路も越えて、われわれはコニングスプレイン北に曲がった。今まで気付かなかったが、コニングスプレインのこの北東角はなんと、直角になっていなかった。ジグザグになっていたのである。

コニングスプレイン北にレイスウェイクから下って来る道ガンセクレタリ Gang ecretarie の対面に、像で飾られた建造物がある。これは自噴井だ。その左には電話局があり、更にオランダスポーツクラブがある。このコニングスプレイン一周はまるでおとぎの国を巡っているようだった。[続く]

「バタヴィア紀行（20）」（2020年07月08日）

エブロは更に前進して、コニングスプレイン宮殿の前で止まった。正門から近い場所に待合室があり、その前の広い道が宮殿テラスの階段へと続いている。ジャワ人兵士が警備詰所の表に立っている。ここは東インド総督の宿舎兼執務所だが、総督はたいていバイテンゾルフ宮殿にいて、あまりここにはいない。せいぜい月に一回やってくるだけであり、加えて何かの行事があるときに数日ここに滞在する。総督は東インド植民地軍とオランダ海軍南遣艦隊の最高司令官である。そして東インドにおけるオランダ女王の代理人であり、その立場はオランダ本国政府植民地相よりも上位にある。本国政府のビューロクラシーからの独立性はこうすることで保たれるのだろう。

われわれはほぼ半時間でコニングスプレインを一周した。エブロの料金はひとり15センで足りた。われわれがハルモニの前まで戻った時、時間は8時15分前だった。8時半には兵舎に戻っていなければならないのだ。

ハルモニ前の道路は歩道脇がトアンとニョニャを待っている馬車や四輪自動車で埋め尽くされている。プリブミのお抱え御者や助手の恰好は珍妙だ。白色ズボンの上に足首までの濃赤色の長衣を着て、シルクハットをかぶっており、そして例によって裸足だ。エイヘンヘルプの店の前に客待ちのサドとエブロがいた。
演奏会が行われているハルモニの庭園入り口は混雑していない。騎馬隊兵士とプリブミ伴侶のカップルが数組いて、他に印欧混血青年のグループがいるだけだ。白の制服を着た警官が剣と帽子なしで警棒だけを持ち、5人のオパスを指揮して入り口の警備に当たっている。

庭園の中では、煌々たる電灯の明かりの下で大勢の聴衆が音楽を鑑賞している。子供たちは入り口と会場を結ぶ小道で走り回っている。ヨーロッパ人男女はヨーロッパの衣装を着、将校は白の服装で、そんなか

れらの間をジャワ人が頭に鉢巻をし全身白づくめで忙しそうに立ち働いている。テーブルに呼ばれては飲み物の注文を受け、注文品をテーブルに届けるのがかれらの仕事だ。

「さあ、帰る時間だ。」突然ヘンドリックが言った。警備詰所でクントガンが8回打たれ、夜の風に乗ってあちらこちらからラッパの音が聞こえて来た。

「プクルブム pukul bum だ。」と言うヘンドリックの言葉の端から、軍艦やシタデルの鳴らす大砲の音がバタヴィアの夜の空気を震わせた。プリブミは夜8時の大砲時間のことをプクルブムと言っている。街中にいるひとびとが一斉にポケットから時計を出して、自分の時計がこの時報に合っているかどうかを確かめている。午前5時にもこの大砲は鳴らされている。

昔から続けられてきたこの弾薬消費の習慣がたいへんな無駄であることに気付いた者が、あるときそれをやめさせてしまった。そして正確な時報は電話で確認できるようになった。伝統と呼ばれているものの中に倹約できる無駄がいかにたくさん転がっているかを示す一例だろう。

われわれはエブロを呼んで、四人で兵舎に向かった。水門橋を越え、ヴァーテルロー広場を通り、スネン方面に向かう。およそ15分で兵舎入り口にたどり着けた。見ると、酔っ払い兵士がひとりいて、かれを連行しようとしている憲兵に怒りをたぎらせて抵抗しているではないか。かれはネイメーヘン以来の札付きの酔っ払い兵で、そのために何度も罰を受けているというのに改心の気配はさらさらない。東インドまで来て、なじみの牢獄を作ろうとでも言うのだろうか？

翌日かれの素行歴を見た将校は、憲兵隊留置場に14日間留め置き、その間水と飯しか与えない、という厳しい処罰をかれに与えた。この兵士は東インド到着後三カ月ほどで素行不良兵の烙印を捺され、あるとき発熱して容態が悪化したおり、その四日後、東インドに6カ月もいないまま死去してしまった。かれが東インドで体験したものはデパイプと、兵士に禁止されている華人カンプンの飲み屋ワルン、そして憲兵隊留置場がそのすべてだったのかもしれない。

われわれは翌日、バタヴィアをネーデルランド号と共に去るアブドゥラを見送りにタンジュンプリオッ港へ出かけた。みんなは故郷の親族に言づてを頼んだ。こんどアブドゥラがバタヴィアに戻って来るときには、きっと故郷からの便りと一緒だろう。友よ、その日まで。[完]

「バタヴィア紀行（終）」（2020年07月09日）

＜ 後記 ＞

この作品は、19世紀末にバタヴィアの首都防衛軍予備隊の兵士となった作者が、ずっと後になって昔の感慨を思い出しながら書いたもののようだ。作者はオランダでこれをマスメディアに載せようとしたが、最終的にバタヴィアで活動している出版社が採り上げてくれた。

掲載されたのは、植民地軍を退役してジャーナリストになったクロックナー・ブロウソン H.C.C Clockener Brousson が発行している雑誌「オランダの旗」Bandera Wolanda で、1910年から1912年にかけて分載された。掲載に当たって、ブロウソンがかなり原稿に手を入れたようだ。掲載するためにはブロウソンの自由な書き換えを認めることという交渉内容を記した手紙が残っている。オランダで発表できなかったのは、原稿のクオリティに問題があったからなのかもしれない。

内容は、作者がバタヴィアへやってきた最初の数日間にバタヴィアを周遊して、そのとき目に触れた印象を書いている形になっているが、そして本人の身の上話からその時期は19世紀末だろうと推測されるのだが、実際にこれが書かれたのはそれから十数年経過した後の時期であり、つまりは二十世紀初期に当たっていて、作品に書かれてある内容がほんとうに十九世紀末のことなのかどうかについては確信が持ちづらい。

そこまで細かな時代考証をしなくても、バタヴィア最期の半世紀の状況と雰囲気をわれわれはここから感じ取ることができるだろうと考えて、わたしはこの作品を紹介することにした。写真や地図や年代記をまとめたその土地の歴史よりも、その時代を目で見、肌で体験した人の手記のほうが、過去の時代のイメージを構築するのにはるかに強力な手引きになるであろうことは論を待たない。

作者もこの自作をバタヴィアの観光振興の一助にという意図の下に書いている。本文中にも見られるように、ジャワ島観光を望むオランダ本国人は微々たるものでしかなく、反対にアメリカ・イギリス・ドイツからの観光客がマジョリティを占めていた時代であり、もっと大勢のオランダ人にバタヴィアを見に来てもらいたいという作者の希望がこの作品の中に漂っている。

原文には軍や政庁への批評なども記されているが、わたしの意図にそぐわないので、ほとんどを割愛した。読者には、オランダ植民地時代のジャカルタの雰囲気を、この拙訳を通して少しでも味わっていただければ、大いなる幸いであります。

原作にある、バタヴィアの夜回りの話と植民地軍の脱走兵事件は観光記の中に入れずに別稿とすることにした。夜回りの話は下記するとして、脱走兵事件はまた別の記事にて紹介しようと思う。

ジャカルタの住宅地区では、道路に一定距離を置いて警備詰所が設置されている。プリブミはそれをガルドゥ gardu と呼んでいる。この言葉はひょっとしたらフランス語に由来しているのではないだろうか？フランス語には garde という言葉があり、そして住宅地区で夜間警備のシステムが行われるようになったのがダンデルス総督の時代だったのだから。

そのガルドゥには夜、数人のプリブミがやってきて警備に当たる。ガルドゥは石造りの箱のような形をしていて、その中には椅子や仮眠できる家具が置かれている。かれらは夜の間、交代で見張りに立つから、非番のときに仮眠するということだ。かれらの武器はほとんど武器と呼べないもので、普通は長い竹竿の端にフォーク様のものを取り付けたのを使って、逃げる賊を後ろから捕まえる。

詰所の表にはクントガン kentongan あるいはトントン tong-tong と呼ばれる穴をえぐった長い木の棒が吊り下げられ、30分ごとに鳴らされる。クントガンは火災・殺人・泥棒などの異変が起こったことを住民に知らせる警報器だ。クントガンはたいてい、筒棒の上部に彫刻が施されている。

巡回パトロールの警官やオパスがやってくると、見張りは「ヴェルダ？」と誰何し、やってきた者は「プレン」と答える。ヴェルダは Wie ist daar?、プレンは vriend のことだ。あちらこちらの警備人は焚火をする。見張りに就いている者たちは焚火を囲んでうまそうにタバコを吸っている。この警備システムの正式名称は herendienst と呼ばれ、住民の自主的夜間見回り制度を指している。

この制度では、警備人は地元住宅地の住民で、報酬はなく、交替でこの義務を果たす。地元のエリートはたいていこの義務に従わず、金を払って代行者を雇う。

警察はその機能の大改造を現在進めていて、このガルドゥ制度は廃止される方向になっている。[完]

++++編集後記+++++

この文章の写真と図は読者の理解を助けるために脚注とともに編者が追加したものです。写真はウエブサイトからお借りしました。ありがとうございました。

挿入した地図は https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/d/df/Batavia%2C_1920.png からダウンロードしたので、これと文中の記事と見比べてください。新たな発見があるかもしれません。この地図は 1920 年当時のものでこの記事の年代から 20 年余り後のものであることを認識しておいてください。

また、この地図は英文の観光旅行書に添付されていたものらしく、現地のオランダ語の名前の一部は英語に翻訳されています。この当時の表記は現在のものと異なります。Tj→c, Dj→j, J→y, oe→u です。

この年の前後の地図と見比べると鉄道線路などの位置は異なっています。例えば、(1)ジャカルタコタ駅から西に向かうルートが駅の南側を通っていること、(2)タナアバンからマンガライ間のルートが地図上北に偏っていること、(3) パサルスネンを通る SS 線とガンビルを通る NIS 線の間の連絡線のルートが現在のルートとは全く異なります。この地図にある鉄道線路の遺構の一部は 1990 年頃までは残っていたとのことを親友のたけちゃんが教えてくれました。

最初のジャカルタ日本人学校はガンシャウランにあったとその時通学してした石居日出雄翁が語ってくれました。

編集者　田口重久
2020 年 7 月 13 日
訂正　2020 年 7 月 16 日　たけちゃん、ご指摘・ご教示ありがとうございました。
編集　2023 年 5 月 03 日　PDF 化

Omdoyok のメインページに戻る	友人達の論文目次に戻る

Mail to: omdoyok@infoseek.jp